

## 学習障害の児童に見えてきた光を遮断しているのは

原島 愛隣

近年 LD や ADHD などの認知度が高まりつつあり、テレビで特集番組が組まれたり、新聞で連載記事が書かれたりと今まで教育や障害に縁遠かった人々もそういった内容を見聞きする機会が増えている。それと並行してタブレット端末やその他の教育的機器の発達も進み、LD や ADHD の子どもたちの「希望の光」が見え始めている。私は最近、学童ボランティアの活動や、教育実習などを通して周りから気づかれにくい困難さを抱える児童、特に学習障害と思われる児童について真剣に考える機会が多くあった。彼らと関わる中で彼らに降り注ぐ「希望の光」を「学校」が遮断しているのではないかと疑問を抱いた。

最初に学習障害について真剣に向き合うようになったのは学童ボランティアで出会った少女への学習支援に携わったのが始まりである。それまでも大学の特別支援教育関連の講義の中で学習障害について学んだことはあったが、どちらかといえば知的障害児教育や病弱児教育などに興味関心を抱いていたため、学習障害の分野を率先して学ぼうとは思っていなかった。ある日、勉強を見てもらいたい子がいると学童の指導員さんから促され、一人の少女に出会った。彼女は小学一年生。意思疎通、会話に困難はなく、喜怒哀楽のはっきりしている子である。しかし他の友達とのかかわりが苦手で、気に入らないことがあるとすぐに泣いたり、相手を殴ったりする。殴り始めるとこちらが止めるまでやりつづけることもあるような実態である。私は主に彼女の算数の勉強をみることになった。といっても学童という特殊な場であるため本格的に勉強を教えるというより、小学校からでた宿題の支援をするという形である。私と彼女のスタートはまず 1 から 10 までの数字の並びを覚えるところからだった。彼女は 1 から順に唱えることはできるが、一つの数字をみせ、「これは？」と聞くと間違える。おそらく、数字の順番以前に「数字」と「数字の読み方」が一致していないと思われる。順番通りに唱えられるのは歌やセリフを覚えるかのごとく音の流れだけが頭にインプットされているだけなのだと考えられる。その他の記号についても同様の理解だと思われる。「たしざん」「ひきざん」という単語は知っている。しかしそれらを示す記号「+」「-」と合わせて覚えることはできていない。それどころか、この文章問題（または図）は何算を使えば良いのかもわかっていない。一日目は「2 桁-1 桁=1~10」のひきざんをした。彼女の実態が全くわからないままのスタートだった。式の数字分の○を書き、斜線で消していくやり方をとり、なんとか最終問題までいったものの全く彼女の身になっていないとすぐにわかった。式の数字の下にその数の分の○を 1 から口で唱えながら書き、引く数の分を 1 から唱えながら斜線をひき、残った○を 1 から唱えながら数えて、「1~10」まで書かれているメモをまた 1 から唱えながら目的の“言葉”にたど

り着いたらそこにある数字を書くという流れだった。そう。彼女は式を解いているのでも、数字を求めているのでもない。すべて1から唱えてたどり着いた“言葉”を数字という文字におこしているだけなのである。それに気づいた私は、その晩、数字と読み方が一致するような教材を画用紙で作った。1~10までの数字を書き、それぞれの下に読み方を書き、適宜切れ込みや折れ線を入れた。この工夫は数字や文字だけを隠すことで数字と読み方の一致を測ったり、1から順に数えないと数字を読めないことへのトレーニングとして特定の数字だけを表示したりするためである。翌日それをもって学童へ向かった。宿題を始める前に、作った教材を使い数字を読ませた。やはり1から順に数えるとスラスラいくが、特定の数字を見せると止まったり違う数字を答えたりした。予想通りである。しかし次に読み方だけで数えさせたとき新たな壁に直面した。ひらがながわかっていなかったのである。こちらも数字と同様に順番に唱えるのはできるが、特定の読み方を提示し数字を書くよう指示するとできない。「じゃあ読み方は何だっけ？これを声に出して読んでみよう。」という目の前に「よん」と書いてあるのにもかかわらず「ろく！」と答えるのだ。彼女の困難さが数字だけでないことに戸惑った。しかし、嬉しいこともあった。彼女が私の作った教材を喜んでくれたようなのだ。私の前では「もう今日は終わりにしよう。」といってくるが私のいないときに「今日先生来ないの？」と言ってくれたり、教材を使って頑張ったりしていたという話を学童の指導員さんから聞いたのだ。私と彼女の交流は始まったばかりだが、彼女がわかる喜びをたくさん感じられるようさらに教材研究を重ねようと考えている。だが、ここは学童であり学校ではない。できることは宿題の支援だけに限られているし、理解を深めるための課題を強要することもできない。彼女は小学校で実態にあった教育支援を受けられているのだろうか。一斉授業に置いてきぼりにされていないだろうかといろいろと考えてしまう。そんな矢先に、教育実習が始まった。彼女の小学校とは違う学校で小学三年生を担当させていただいた。

教育実習中も事あるごとに学習の困難さを抱える児童に目を配っていた。私の実習校での取り組みは次の通りである。個別支援推進補助員という方がほぼ常勤で児童の支援を行なっている。しかしそのほとんどの時間を肢体不自由児の支援に充てていた。他には、特定の教科に困難を覚える児童はその教科のときだけ特別支援学級に移動したり保健室で自分のレベルにあった課題に取り組んだりしている他、算数など一般的にみても理解度に差がでやすい教科についてはその教科だけ学年単位でレベル分け授業をしていた。しかし、それだけで補えるわけがない。LDやADHDの可能性のある児童は他にもたくさんいる。しかし小学校は30人前後を相手に45分間という短い時間でその日の学習課題を終わらせなければならないから、遅れている児童をいつまでも待ったり、動き回る児童を個別指導したりしている時間的余裕はない。私が低学年のころまでは、そういった児童を放課後残らせて指導したりもしていたが、子どもを狙った犯罪が増え私が高学年になる頃にはほぼ毎日一斉下校になってしまったため、放課後の

個別指導ができないのが現状である。20分休みや昼休みに指導する方法もあるが、1日5、6校時もある内容を教え切るのはほぼ不可能である。子どもの実態を理解した上で教育熱心な家庭なら家庭学習で少し補うことは可能だが、そうではない家庭の子どもで塾やその他の教育の場にも通っていない子どもはどのようにして学習に追いつけばよいのだろうか。日に日に追いつけない課題が増え、他の児童との差が明確になっていきさらに学ぶ意欲を失う可能性がある。教育実習前は、そういった児童には児童の困難さを解消できるようなプリントなどを用意して、取り組めるよう配慮するのが担任の役目だと持論を展開していたが、実際に現場にいると教師自身も児童が何につまずいているのかを把握する時間がないうことがわかった。実態把握ができるのは授業中の机間巡視やノートチェックのときくらいで、その児童が学習に困難さを覚えていることはわかっていても、何が引き金になっているのかを掴むのは今の体制では非常に難しいと感じた。これではいつまでたっても問題は解決しない。補助教員を採用する予算等の関係もあると思うが、個別支援推進補助員を1人か2人増やしたり、他の役職の教師が週に一度くらい学習の困難さを抱えている児童の見回りをしたりして、担任一人では気づくことのできない「困難さの引き金」を探し出す手助けをすることが求められていると強く考えている。担任任せにせず、もっと教員同士の連携、情報共有を強くし協力しあうべきだと思うのだ。

補助員の雇用も良い手段の一つだが近年もう一つの光が動き始めている。タブレット端末をはじめとする、電子教材の普及だ。今まで学習障害の児童を助けてきたものとして人間のサポートや実態にあったプリントなどがある。しかし、人間のサポートは臨機応変な対応が可能だが、児童との信頼関係次第で効果が変わってくるし授業中に頻繁に声をかけると周りに迷惑をかけてしまう。プリント学習では児童が自分の力で授業に参加できる点では有効だが「読むこと」が困難さの引き金となっている児童に対応することができなかつたり、教師がプリントを作成する時間的余裕がなかつたりする。タブレット端末は、「読むこと」「書くこと」「聞くこと」どれに困難さの引き金があったとしてもおおよその場合対応することができるし、状況によっては毎回プリントを用意する手間も省くことができる。もちろん欠点もある。一人の児童にタブレットを許可すれば周りの児童が黙っているわけもなく、そこからいじめに発展する可能性があるし、かといって全員にタブレットを与えると設備費用や教師の研修などを要し、莫大な予算等の問題も出てくる。その他、利点や欠点があるが、本や新聞などの資料で確認することができるのでここでは割愛する。幾つかの方法を取り上げたが、いずれにせよ社会全体としてLDやADHDの子どもや大人への関心が高まっていることは事実であり、彼らのための支援方法も多様化、利便化してきている。

しかしどんなに周りが叫んでも、どんなにアプリを作り出しても彼らの学習の困難さに一番対応すべき「学校」でそれらが阻害されては意味がない。家庭や学童、塾などで補うのには限界がある。学

校という最適な場所で最適な教育を受けさせることが一番である。現在さまざまな学校で学習の困難さを抱える児童に対して試行錯誤しながら対応している。私の実習校でも上記に述べたような取り組みをおこなっていたがそれでは全く足りないのだ。補助員がついたり、保健室学習をしたりしている児童はいるがごく僅かであり、学校全体としてしてみると全く対応しきれていないのが現状である。これは私の実習校だけのことではなく全国的に同じことが言えるのではないだろうか。しかし決して学校の取り組みが甘いわけではない。学校としてはできる限りのことをしているのはよくわかった。現状の問題点は、一番対応すべき「学校」でも限界値がとても低いところにあることだと考える。いくら頑張ろうとしても人手不足や資金不足によって限界が作られてしまう。「希望の光」を直前で遮断しているのは「学校」だが「学校」も「光を照らすための対策の道」を遮断されているのだ。つまりこの問題点を解決するためには各学校単位での対策ではなく全国の教育機関単位での対応策を考えるべきだということである。学習障害に対する関心が高まってきている今だからこそ、市町村、都道府県、国として早急に対策に取り組んでほしい。私も学習障害の児童に対し何ができるのかを考え日々研究を重ねて少しでも力になれるよう精進していきたい。